



Title	現在完了形の「現在」：「未確定性」としての Current Relevance
Author(s)	山内, 真理
Citation	大阪大学言語文化学. 1996, 5, p. 149-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現在完了形の「現在」

—「未確定性」としての Current Relevance—*

山内 真理**

The purpose of the present study is to set up a framework to describe how the English present perfect locates a situation before the time of utterance while indicating some “presentness”, which is often referred to as “current relevance”.

In this study, it is shown that “presentness”, or “current relevance”, can be observed as the speaker’s commitment to his/her communicative act, and that the use of the present perfect is motivated by the speaker’s assumption or expectation of subsequent interaction between the speaker and his/her addressee.

The present perfect is used to present a prior situation as one leaving its consequences open, i.e., changeable or negotiable. The “openness” can manifest itself on several levels: e.g., the mentioned situation is understood to constitute a larger unit of situation which is not completed; the mentioned situation is understood to motivate another action in the extralinguistic contexts.

* “Presentness” with the Present Perfect: Current Relevance as Consequences Left Open (Mari YAMAUCHI)

** 言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

完了形 (have + -en) は、一般に、「事象の起こった時」と「それ以後の時¹⁾」という二つの時点を意味に含み、「当該の事象が、ある時点に先行して生起している」ことを表す。このため、例えば (1)においては、副詞句 at ten o'clock は、事象の起こった時点か、それ以後のある時点かのどちらにも解釈できる (cf. Frawley, 1992: 348)。

(1) Tom had seen the movie at ten o'clock.

現在完了形の場合、この「二つの時点」は、「過去」(事象の生起時)と「現在」(それ以後の時)と解釈され、「当該の事象が、発話時に先行して生起している」ことを表すという規定が得られる²⁾。

ところが、英語には「現在に対する先行性」を表す別の形式、つまり、単純過去形が存在する³⁾。このため、他の完了形 (過去完了形、完了不定詞など) とは違い、現在完了形については、過去形との対比を明確にする規定が求められる。言い換えれば、現在完了形に含まれる「現在」に対して、時間的な位置関係 (先行性) の起点という以上の特性を与えることが求められるのである。

そのような要請に応えようとする概念の一つに「現在との関わり」(“current relevance”)⁴⁾がある。しかし、“一般的”な意味での「現在との関わり」は、どの

¹ここで認める「それ以後の時」は、Reichenbach (1947)の提案した「基準時点 (point of reference)」に相当すると思われるが、ここでは、「基準時点」にどのような役割を与えるか、「基準時点」という概念装置が必要かどうか、という点についての議論には立ち入らない。少なくとも、例(1)に示すような、時の副詞の両義的な解釈は、Reichenbach の規定 (時を指定する副詞句は、基準時点を指すものと解釈される) が適用できない現象のひとつである。

²現在完了形が条件節に現れる場合を除く。

³直観的には、過去形は「一つの時点」(つまり「過去」)しか表さないと思われるが、「過去」が「現在以前」である以上、結局は同じ意味規定に還元されることになる。

⁴“current relevance”という概念は、完了形の一般的な意味としてではなく、下位的な「意味」の一つとして扱われることもある。その場合、語彙的に予測される具体的な結果を表す「結果用法」と対比させ、下の例の括弧に示すような、「語彙の意味からは予測できない結果あるいは影響」が“current relevance”と呼ばれる。

a) He has studied the whole book. (So he can help.) (Anderson, 1982: 228)

b) I've just eaten dinner. (So I don't want any more food.) (Bybee et al., 1994: 61)

ような「関わり」でもよいとしか規定されていない(cf. Palmer, 1965)、次のような批判を免れえない:

Since Grice's (1975: 45) Maxim of Relation (Relevance) stipulates that a co-operative speaker should only say things that are relevant, this watered-down notion of current relevance ultimately applies to any statement, whether it is in the present perfect or not. (Declerck, 1991: 340)

一方、1節で確認するように、“具体的”な意味での「現在の関わり」も、現在完了形の意味や使用の条件を適切に規定しているとは言えない⁵⁾。同節では、「関わり」の最も明確な現れ (Comrie, 1976: 56) とされる「結果の現存」を中心に、この点を確認する。

Leech (1971)や Comrie (1976)などは、これらのタイプも「結果用法」とした上で、語彙的に予測される「最も明瞭な」結果 (状態変化を表す動詞の場合) と語彙的には予測しにくい結果があると考える。

どちらの用語法をとっても、「語彙の意味からは予測できない結果あるいは影響」の中に、次のような、“Nil-result” (“the expected pragmatic consequence does not come about” (Fenn, 1987: 113))も含められる点に注意したい(cf. Palmer, 1965)。

- c) I've asked around all over the place, but no one seems able to give me the answer. (Fenn, 1987: 113)
- d) Eva, look I've phoned the doctor but he's not there. (ibid.)

⁵⁾それぞれの「意味」は、文脈に依存する含意にすぎず、それによって完了形と過去形を対比させることはできない立場もある(Bryan (1936: 366-7)、Inoue (1979: 563)、Declerck (1991: 339)、Frawley (1992: 349)を参照)。本論も、過去の事象の結果、現在どのような状態になっているかについての知識は、推論によって得られるものであり、完了形にしろ、過去形にしろ、その形式じたいは、現在の状態について断言(assert)するための形式ではないという立場に立つ。例えば、以下の二例では、“lose” という動詞が「状態変化」(所有→非所有)を表し、完了形/過去形が「その状態変化が発話時以前に成立している」ことを表し、“just”が「その変化が最近のものである」ことを表すために、どちらの例でも、発話者が現在、排気管をもっていないという推論が得られる。(整備工場で、客がスタッフに)

- a) I have just lost my exhaust pipe.
- b) I just lost my exhaust pipe.

このような捉え方は、伝達される内容どうしの関係にのみ注目している点に問題があり、2節以下で見ていくように、「発話者が発話時において事象をどのように扱っているか」という要因を考慮することによって、現在完了形の使用をより明確に説明することができる。本論では、現在完了形に含まれる「現在」を「未確定性 (openness)」として特徴づけ、この形式の一般的な意味として、「過去の事象を、発話時においてその結果が確定していないものとして提示する」という規定を提案する。

2 「現在に残っている結果」

様々な「現在との関わり」の中でも、「事象の結果が現在も残っている」ことが最も明瞭な「関わり」であるとされる。この場合の「結果」は、かなり広い意味で理解されなければならない。例えば、(2a)のような、語彙的に状態変化を表す動詞の完了形は、動詞の意味から予測される結果状態 (2b) が残っているという解釈を伴うことが多い。この種の動詞の完了形が、語彙的に決定される「結果」が残っている場合にだけ使用されるのであれば問題はないのだが、実際は、(2c)に示すように、そのような「結果」が残っていない場合にも、完了形は使用される (cf. Declerck, 1991: 325-326; Klein, 1994: 107)。

- (2) a. I have closed the door.
 b. The door is closed.
 c. I have closed the door, but now it is open again.

このため、完了形が表すとされる「結果」には、(3)に対する(4a)~(4d)のような様々な「読み」や、特定の状態変化を意味に含まない動詞の完了形に与えられる「読み」(cf. 註 4)が含まれることになる (cf. Palmer, 1965: 75; Declerck, 1991: 325)。

- (3) They've fallen into the river.
 (4) a. They're in the river.
 b. We have to help them.

c. They're soaking wet.

d. That's how they got pneumonia.

何が「結果」とみなされるかが特定できなくとも、過去の事象の結果として生じた何らかの状態が現在に残っている場合に、常に、完了形が選択されるという一般化ができれば、このような広い意味での「結果」にも、説明力を認めることができるだろう。

しかし、そのような一般化は無理である。まず、少なくとも、「ある結果が残っている」というだけでは、完了形を選ぶ条件にはならない⁶⁾。例えば、(5)の例は、いずれも、現在に何らかの結果を残した事象を表現しているとみなすことができるが、完了形だけでなく、過去形も用いることができる。

(5) a. (バス停で隣の立っている人に) You {have dropped / dropped} your ticket.

b. My old bicycle now looks new. George {has painted / painted} it.
(Elseness, 1989:175) ⁷⁾

⁶⁾「結果」の意味で両形が使用可能であることについての指摘は多い(Bryan, 1936; Chafe, 1973; Miller & Johnson-Larid, 1976; McCoard, 1978などを参照)。Gathercole(1986)の実験は、次のような「起こったばかりで、かつ、結果を残している事象」を指す用法が、完了形と過去形の交替が最も頻繁に起こる用法であることを示している。

a) My pen {has just run /just ran} out of ink. (Gathercole, 1986: 541)

b) The mailman {has already brought/ already brought} the mail. (ibid.)

付け加えれば、「近接性」は、少なくとも英語に関しては、完了形の使用条件とはならない。完了形に使用は、客観的な基準をもつ「時間的な近さ」には左右されないからである。また、主観的に「最近の出来事」という意味合い伝えるのは、“just” “recently”等の副詞の働きであって、完了形の働きではない(cf. Bryan, 1936; McCoard, 1978; Inoue, 1979; 他)。しかし、「近接過去」の完了形を“hot news”の完了形(McCawley, 1971)と捉え直せば、「発話者／聞き手にとつての新しさ」という情報価値の点での特徴が抽出できる。この特徴は、本論で提案する完了形の意味規定と密接な関わりをもつ。

⁷⁾Elseness(1989)は100人の英米人大学生を被験者として、短文の容認性の判断(「1:全く容認できない」～「5:完全に良い」の5段階評価)を調べた。ここに引用した文についての結果をあげておく:

(5a) 完了形 (英)4.8 (米)4.9 過去形 (英)3.2 (米)4.1

(5b) 完了形 (英)4.0 (米)3.0 過去形 (英)4.3 (米)4.7

- c. You speak remarkably good French. {Have you ever lived / Did you ever live} in France? (ibid.)

さらに、「ある結果が残っている」場合、その結果をもたらした事象を表現するために常に完了形を用いることができるわけでもない。例えば、(6a)~(6d)では、現在の状態(それぞれ、「窓が壊れている」「Ted がここにいる」「傷が良くなっている」「私が遅刻した」)をもたらした過去の事象を表現しているが、完了形を用いることはできない。

- (6) a. “The bathroom window’s broken!” she said. [...] “Mom,” he said, coming back with Randal’s razor and a package of blades in his hand. “He threw (* has thrown) these through the window.” (Price)
- b. “That’s Ted Mundy,” said Rigby with satisfaction. “I told (* has told) him to be here.” (Le Carré)
- c. She looked at me and I took in the eyes and skin. “Your head’s better,” she said. “Yes, thank you. (It) cleared (* has cleared) up in no time.” (Amis; Fenn (1987: 175)に引用)
- d. I’m sorry I’m late. My car {broke / *has broken} down.⁸⁾

「ある結果が残っている」場合に完了形の使用が制限される最も顕著な例は、創造動詞(“creation verb”)を用いる場合である。この種の動詞の意味には、対象の発生という状態変化が含まれ、(5)の場合と同様に、完了形／過去形ともに、その状態変化の結果(つまり、対象の存在)を伝える。しかし、(7b)のように、発生した対象が定名詞句で表現される場合には、完了形を用いることができない(cf. Quirk et al., 1985: 184; Declerck, 1991: 346-349)。(7c)(7d)に示すように、この制約は、創造動詞以外の動詞が用いられる場合には適用されない。(7a)と(7b)の違

どちらの形式を好むかに関して方言差が見られるが、この文脈では(少なくともこれ以上の条件が追加されなければ)、方言に関わらず、完了形・過去形ともに許容されることが分かる。

⁸⁾(6d)は、自分の遅刻について謝罪するという、自然に喚起される文脈で不適切なのであって、この二文の組合せにおいて完了形を用いること自体があり得ないというわけではない。この点に関しては4節の例(12)で取り上げる。

い、そして、(7a)(7b)と(7c)(7d)との違いは、事象の(何らかの)結果が残っているかどうかではなく、次節で見るように、むしろ、その事象の情報価値の点にある。

- (7) a. John {has built /built} a wall.
 b. John {*has built /built} the wall.
 c. John {has painted /painted} a wall.
 d. John {has painted /painted} the wall.

また、(8)のように、同じ事象に言及する二つの文の一方で、完了形が容認されない場合もある。通常、最初の言及(例えば(8a))では完了形、それ以降の言及(例えば(8b))では過去形が用いられ、この逆はない。(8a)と(8b)の違いも、(7)と同様、事象の結果として生じた現在の何らかの状態の点での違いとは言えない。

- (8) (a) The secretary general of Liberal Democratic Party, Yoshihiro Mori, has said the revision of some taxes may be the focus of a new economic package [...]./ (b) He said(*has said) the taxes to be reviewed include [...]. (NHK News 9, June 15, 1995)

このように、ある事象が「何らかの結果を現在に残している」かどうかという基準だけでは、完了形が選択されるかどうかを決定することはできない。

3 「共有知識」による説明

前節で確かめたように、完了形の選択がどのように決定されるかを見極めるためには、以前に起こった事象とその事象がもたらした現在の状態の点にのみ注目するのでは不十分である。そこで、発話者が、発話時において、事象をどのように扱っているか、という点にも目を向けることにする。発話者は、以前に起こった事象とその結果としての現在の状態の関係、つまり、伝達される内容どうしの関係をどのように捉えているのだろうか。

この方向で考えていくことは、完了形／過去形の選択が、対話者間の共有知識いかに影響されるという知見(Declerck, 1991; Fenn, 1987; Quirk et al., 1985; 他)からも支持される。「共有知識」とこの二つの形式の選択との関係は、具体的

には、ある事象が以前に起こったということが、既に共有知識となっていると、完了形の使用が制限されるというものである。

例えば、まず、(7)に示した、創造動詞の完了形の特異性は、次のように説明される。定名詞句は、その指示対象の存在が共有知識として扱われていることを示す。そして、対象の存在は、以前に創造行為(存在をもたらす行為)があったことを含意する(entail)。従って、定名詞句と創造動詞を含む文では、常に、共有知識となっている事象が表現されることになるため、その文で完了形を用いることはできない。別の例をあげれば、(9a)が容認されないのは、“America”という語の指示対象が存在しているという知識が共有されていれば、その存在を(比喩的な意味で)もたらした“discover”という行為もまた共有知識とみなされるからである。従って、(9b)のように、アメリカが発見されたという知識が共有されていないという想定にもとづいた会話を考えれば、そこでは、完了形を用いることが可能になる。

(9) a. *America has been discovered by Columbus.

b. America has been discovered by Columbus, thus you need not do it.
(Dietrich 1955: 195; McCoard, 1978: 45)

また、完了形が、先行談話で導入ずみの事象に言及できないこと(cf.(8b))も同様に説明される。(8b)を発する時点では、先行談話(8a)において、税制改革についての発表があったことが導入ずみである。従って、(8b)の動詞は、既に共有されている過去の事象に言及することになるため、完了形を用いることができない。

共有知識の点から見た時の完了形の使用に関する制約は、かなり一般性の高いものではある。しかし、創造動詞を用いない文や、初めて言及された事象(つまり、発話時において共有知識とはみなされていない事象)について、完了形／過去形がいかに選択されるかを説明するには、さらなる条件づけが必要である。

例えば、(10)の“receive”は創造動詞ではなく、(10a)(10b)に示すように、対象が定名詞句で表現されるかどうかは、完了形の選択に影響しない。しかし、さらに情報を付け加えると((10c)(10d))、対象が定名詞句で表現される場合((10d))に完了形を用いることができなくなる⁹⁾。

⁹⁾(10d)の例を指摘したのは Diver (1963: 158) であり、完了形と定名詞句は両立しないという主張をしたが、そのような一般化は強すぎ、認めることはできない。

- (10) a. I { have received / received } a new pen.
 b. I { have received / received } the new pen.
 c. I { have received / received } a new pen as a gift.
 d. I { *have received / received } the new pen as a gift.

また、(11)に示すように、言及ずみの事象に再度言及する場合((11b))でも、完了形が選択されることがある。

- (11) (a)The Egyptian leader [Nasser] has died at a most awkward moment for the Russian, who were trying to consolidate their position in the area. [...] / (b) I should not like to say that this tragedy has occurred at a particularly unfortunate time. It would be a most improper thought. (McCoard, 1978:83)

(10a)(10b)と(10c)(10d)との違い、(8b)と(11b)との違いは、「事象が過去に起こった」ことが共有されているかどうかという点からだけでは説明できない。次節では、「共有知識」が選択に影響するという知見を生かしつつ、より広い範囲を説明しうる条件をさぐる。

4 話題が確定されている発話と話題が導入される発話

3節で触れた共有知識の条件は、「事象が以前に起こったこと」についての知識が共有されている場合に、その事象は過去形で言及されるというものである。この基準によって、(7)(8)における完了形／過去形の選択が説明されるが、事象が新情報として伝えられる場合の選択には、この基準は、完了形を使用する／しないの選択には関わらない。

例えば、(6)で伝えられる過去の事象はいずれも初めて言及される事象であるが、ここで専ら過去形が選択されるのは何故だろうか。この選択を左右している要因として考えられるのは、その新情報が「これから話題」として提示されているかどうかである。例えば、(6c)について Fenn (1987: 176) が指摘するように、「頭部の傷の状態」が話題になっていない段階で「すぐに良くなった」という事象を

伝える場合であれば、(12a) のように完了形を用いることができる¹⁰⁾。同様に、(6d)に対しては、(12b) のように、「車が故障した」という事象がこれからの話題であることを明示すると、完了形の容認性が増す¹¹⁾。

(12) a. Look! My head's cleared up in no time.

b. I'm sorry I'm late. But listen! My car has broken down.

このように見ると、上掲の過去形のみが選択される例では、いずれも、先行談話で問題にされた事象を共有知識とし、それを前提として断言を行っているものであることが分かる。すなわち、先行文脈から引き継いだ話題について、新情報を伝えているのである。(6a)～(6d)は、すでに話題になっている状態をそのまま話題として引継ぎ、その状態の原因・理由を新情報として伝えている。(8b)は、(8a)で導入された「税制改革の発表」という話題を引継ぎ、(8a)の伝える情報をさらに詳細化している。

創造動詞を用いてはいないのに、定名詞句と完了形との共起が制限される(10d)も、同様に説明できる。この文の先行文脈は与えられてはいないが、定名詞句(“the new pen”)と不定名詞句(“as a gift”)を共に含むことによって、この一文だけで、「ペン」に関わる話題がこの発話以前に確定しており、「贈り物として」という新しい情報が、その引き継がれた話題に関して提供されているという文脈が喚起されるのである。従って、この文脈で完了形が許容されないのは、(6)の場合と同じ理由による、とすることができる。

このように、先行談話で話題として確定された事象(例えば現在の状態)を前提とし、それについての新しい情報として過去の事象を提供する文(例えば、その状態をもたらした過去の行為を断言する文)では過去形が用いられる。

これに対し、完了形が用いられるのは、まだ話題になっていない事象を談話に導入する場合である。言い換えれば、完了形によって、「これから○○を話題にする」という「それ以後の伝達行為」についての発話者の意図が合図されるのである。

¹⁰⁾ 作例は筆者。

¹¹⁾ ただし、(11b)は、(5d)における完了形の使用に比べて容認度があがっているだけであり、完全に自然な発話であるとは言えない。これは、「話題導入」の表現を機械的に挿入しても、車の故障という伝達内容じたいが、先行文脈との間に「原因-原因」の関係をつくってしまうからであろう。

ここで、「事象が過去に起こった」という知識の共有という条件だけでは説明できなかった(8b)(11b)の違いも明らかであろう。両者とも、同じ事象に対する二度目の言及であるが、(8b)とは異なり、(11b)では、(11a)で導入した情報を前提にし、話題を引き継いで、新しい情報を伝えているわけではない。(11b)では、(11a)で言及した事象を、その事象に対する判断を問題にするために新たにとりあげなおしている。事象そのものから、事象の捉え方へと、話題が転換されていると言ってもいいだろう。

5 「現在」における「未確定性」

前節で見たように、導入ずみの話題を引継ぎ、それに関する新情報を加える場合には過去形が選択される。では、(13a)とは異なり、(13b)では、なぜ完了形が選択されるのだろうか。

(13) a. I'm sorry I'm late. My car { *has broken/broke } down. (= (5d))

b. I'm sorry I can't pick you up. My car { has broken / *broke } down.

(13a)と(13b)は、共に、先行する発話で導入した話題(現在の状態)について、その状態の原因となった事象を伝えており、この対照を、4節で得られた伝達行為上の操作の点からは説明することはできない。そこで、この対照が、過去の事象が結びつけられる「現在」の違いに起因すると考えてみよう。車の故障という過去の事象は、(13a)では、確定的な現在の状態にのみ結び付けられるが、(13b)では、まだ確定していない将来(例えば、「私」は拾えないが、ではその代わりにどうするか)とも結び付けられると考えられる。このような「未確定」な要素が、実際に、完了形／過去形の選択に影響することは、(14)で過去形が選択されることから確かめられよう。(14)は、発話者が、将来の代案(下線部)も用意している文脈であり、少なくとも、発話者は、車の故障を未確定な将来とは結びつけてはいない。

(14) I'm sorry I can't pick you up. My car broke down. Ted will pick you up.

また、完了形が用いられないとされる(10d)の文も、(15)のように、[]内に示すような「未確定」な要因を文脈に示すと、完了形の使用が可能になる¹²⁾。

(15) I've received the new pen as a gift. [Shall I accept it?]

さらに、「未確定性」の条件によって、(16a)と(16b)から得られる優勢な推論の違い ((16a)の「届けは出したがまだ退職はしていない」 vs. (16b)の「届けを出して退職した」) や、(17a)と(17b)の容認性の違いを説明することができる。(17a)は、完了形によって、「言語学をやめた」状態が将来もこのままかどうか「未確定」であることが表され、「また戻るかもしれない」という発話者の判断と整合するが、過去形を用いた(17b)には、その整合性がないために、奇妙な発話ということになるのである。

(16) a. I have given notice at the shop. (Maugham)

b. I gave notice at the shop.

(17) a. John regrets that he has stopped doing linguistics. He might go back.

b. *John regrets that he stopped doing linguistics. He might go back.

こうして、(18)のように、「最終的な結果がまだ得られていない」、あるいは、「最終的な結果に至るかどうか定かでない」ことが明示される場合には ([]内を参照)、もちろん、完了形が選択される。ここでの“award”は、「与えるという決定がなされた (が、実行はまだである)」という意味にしか解釈されない。

(18) A ZURICH judge has awarded the Philippines 400 million Swiss francs (£160 million) hidden by the late dictator, Ferdinand Marcos. [But

¹²McCoard (1978: 106) が、Diver の一般化への反例として考え出した次の例(a)も、本文(14)と同種の文脈操作によるものと考えられる。但し、創造動詞の場合は、この種の文脈を加えても、完了形は容認されない ((b) を参照)。

a) Since I've received the new pen as a gift from them, [I can't very well go around saying they haven't done me any favors.]

a) *John has built the fence. [We have to find another short cut.]

before the money can be returned, a Philippines court must rule that it was illegally obtained and it must survive a likely appeal by Marcos's relatives to Switzerland's highest court.] (*The Guardian*: Jan. 14, 1990) (158)

同様に、(19)でも、語彙的に表現される状態変化が、ある意味で完全には実現しておらず、完了形が義務的に選択される。(19a)では、お茶をあげる相手のいる所までは来たが、お茶はまだ発話者の手元にあり、相手の手には到達していない¹³⁾。(19b)では、会議室に着いていない問題の人物は、「私達」のところに「驚き」をもたらしたが、その「驚き」は、まだ「私達全員」(聞き手を含む)には到達していない。(19c)では、相手の推理によって、確実に冤罪を晴らす見込みはできたが、まだ実質的な行動は起こしていない。(19d)では、発話者の知識によって、賭の判定は決定したものの、賭そのものは終結していない。このような実質的実現の「未確定性」が、完了形の使用を要求するのである。

- (19) a. I've brought (*brought) you a cup of tea, Sir. Wilfrid, and a cup for Mr. Mayhew, too. (Christie)
- b. (地下の会議室にいる上司への内線連絡) "Yes?" "Striker's on his way down. And he's brought (*brought) a surprise." (Pendleton)
- c. (相手の推理を聞いて) "[...] you have saved (*saved) an innocent human life as truly as if you had cut the cord which was hanging him." (Doyle)
- d. (ある鳥が田舎で飼育されたという方に5ポンドかけたという話を聞いて) "Well, then, you 've lost (*lost) your fiver, for it's town bred." (Doyle)

¹³⁾ここでの選択の決定には、社会的な要因が強く働いている可能性がある。「もってきた」という状況を伝えるだけであれば、過去形でも伝えることができる。が、過去形は、その後続段階について(つまり「受け取って飲む」)相手に選択の余地がない、という印象を与える可能性があるために、避けられるのかもしれない。ここでは、そのような要因そのものの検討には立ち入ることはできない。

6 おわりに

本論では、完了形の「現在」には、発話者が、発話時において、事象をどのように捉えているかが反映されるという点を明示しようと試みた。完了形によって言及される過去の事象は、発話者が「発話時において進行している／成立しつつある」とみなす状況と結び付けられ、「発話時においてその後続段階が確定していないものとして」提示される。

事象が結び付けられる進行中の（あるいは流動的な）状況は、伝達行為そのものと、伝達行為の外の状況とに大別される。前者の場合は、過去の事象は、発話者が「これから話題にしたい」と意図しているものとして、後者の場合は、発話者が「未確定な将来」と結びつけて考えているものとして、伝えられる。

このような特性をもつ完了形が、談話操作上、具体的にどのような役割をはたしうるかという点については、稿を改めて分類と分析を行う。

主要参考文献

- Anderson, L. 1982. The “perfect” as a universal and as a language-specific category. In P. H. Hopper (ed.) *Tense-Aspect*. John Benjamins.
- Bryan, W. 1936. The preterite and the perfect tense in present-day English. *Journal of English and Germanic Philology*. 35: 363-382.
- Bybee, J., Perkins, R. & Pagliuca, J. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago press.
- Chafe, W. 1973. Language and memory. *Language*. 49: 261-281.
- Declerck, R. 1991. *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*. Routledge.
- Dietrich, G. 1955. *Erweiterte Form, Präteritum und Perfekt im Englischen: Eine Aspect- und Tempusstudie*. Max Hueber Verlag.
- Diver, W. 1963. The chronological system of the English verb. *Word*. 19: 141-181.
- Elseness, J. 1989. The present perfect in American and British English: Some results from an elicitation test. In Caie, G., Jakobsen, A., Nielsen, J.E.,

- Sevaldsen, J., Specht, H. & Zettersten, A. (eds.) *Proceedings from the Fourth Nordic Conference for English Studies*. vol.1. 169-78. University of Copenhagen.
- Fenn, P. 1987. *A Semantic and Pragmatic Examination of the English Perfect*. Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Frawley, W. 1992. *Linguistic Semantics*. Lawrence Erlbaum.
- Gathercole, V.C. 1986. The acquisition of the present perfect: Explaining difference in the speech of Scottish and American children. *Child Language* 13: 537-560.
- Inoue, K. 1979. An analysis of the English present perfect. *Linguistics*. 17: 561-589.
- McCawley, J. 1971. Tense and time reference in English. In C. J. Fillmore and T.C. Langendoen (eds.). *Studies in Linguistic Semantics*. 96-113. Holt, Rinehart and Winston.
- Miller, G. A. & Johnson-Laird, P. N. 1976. *Language and Perception*. Belknap.
- McCoard, R. 1978. *The English Perfect: Tense Choice and Pragmatic Inferences*. North-Holland.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. University of California Press.

用例出典

The Guardian.

Kingsley Amis. *Girl*, 20.

John Le Carré. *A Murder of Quality*.

Agatha Christie. *Witness for the Prosecution*.

Connan Doyle. *The Adventures of Sherlock Holmes*.

Somerset Maugham. *Of Human bondage*.

Don Pendleton. *Stony Man VIII*.

Nancy Price. *Night Woman*.